

北の國の山ふところの雪にうもれた谷間の一部、そこには風もあたらず、朝日と夕日が照りました。まつしろな雪の中から、うす紫とうすとき色の可憐な花が咲きました。灰色の雲がひくく覆ふ日に峯にはまた新しい雪がつもりました。けれど、つゝましい花と花とのほゝ笑は、年越しにつもた山の雪を下の方から溶いてゆきます。

往年のほげしい、ほこりと風の吹きつける或道ばたの電信柱の下に、ごみの様な雑草がありました。

通りをかいた土だらけの雪をつみ上げられたり、立入坊の布團になつたりしました。節分の晩にはお婆さんが、豆をそばへ埋て行きました。それから十日もたつた或日どこかの人が通りが、りに汚れた草をちつと見ておました。微笑を含んで元氣よく立ち去りました。雑草の中には、泥もごみも事もなげに下萌えの色がのぞいておました。

早春！  
微笑と力！

童話には理解し得る教訓よりも、  
感知し得るユウモア  
を欲しい。  
飯倉だよりより